

絆

結び、結ばれて②

人は誰も、ひとりでは生きていけない。
誰かを支え、支えられて絆を紡ぎ、
ときに笑い、ときに泣きながら生きている。
たくさんの絆を育む人が結んだ線から生まれたものとは。

レーシングドライバー・自動車評論家

太田哲也

Tetsuya Ota

INTERVIEW

生きることに真剣に挑む カッコいい大人の作り方

大震災に襲われた昨年ほど、多くの人が死を身近なものとして意識した年はなかっただろう。だからこそ、限られた生を真剣に生きることが問われる今、それを実践する人の言葉に、目が頷く。彼がそれに挑むために必要だったのは、支えあい、背中を押してくれる絆の存在だった。

● チャレンジの素晴らしさを伝える 第二の人生

サーキットに足を運んだことのある人は、あまり多くはないかもしれない。ましてレーシングカーが走るコースを自分で運転するとすると、一生縁のないことと考えている人がほとんどだろう。

しかし、じつは多くのサーキットでは、講習を受けてライセンスを取れば、誰でも自分のクルマで走ることができる。カー用品店やアマチュアのレーシングクラブ、自動車雑誌の編集部などがコースを借り切り、参加者を募って開催する走行会や、アマチュアが市販車で参戦する草レースも各サーキットで行われている。

そうしたアマチュアレーシングクラブの中でも黄色の存在が「太田哲也とオヤジレーサーズ」(正式名称: TEZZO RACERS CLUB)。日本でも有名なル・マン24時間レースに4年連続で出場するなど、多くのレースで活躍し、「日本のフェラーリ連」の異名を取ったレーシングドライバー・自動車評論家の太田哲也氏が主宰するクラブだ。

参加資格は40歳以上であること。「40歳って、そろそろ人生の着地点が見え、自分にはもう新しいチャレンジはできないのではないかと思始めるころだと思ふんです。でも、人はいくつからでも新しいチャレンジはできるし、カッコいい大人になることもできる。クルマを通してそういう大人を増やすことが、子供たちの世代に夢を与え、若者のクルマ離れと言われる傾向にも歯止めをかけるきっかけになるのではないかと思

ています」と太田氏は趣旨を説明する。ほかにも彼は、多くの活動をしている。広く一般のドライバーを集め、公道での安全運転にもつながる運転技術をサーキットで指導するドライビングスクールの主宰。また若い世代にチャレンジする素晴らしさを伝えようとNPO法人「KEEP ON RACING」を設立。小中学生にクルマの楽しさやチャレンジの大切さを伝える講演で全国を飛び回り、東日本大震災の復興も支援。さらに自身が開発するクルマのチューニングブランド、「TEZZO(テツゾ)」と、それを展示販売するショールームの経営者でもある。

今年53歳になる太田氏が、レーシングドライバーとしての成功を足場に始めた第二の人生としては、誰もが納得する活動だろう。しかし、ここにいたる経緯はそんな単純なものではなかった。彼は1998年、38歳のときにレース中の事故で瀕死の重傷を負い、レーシングドライバーとしてどころか、社会人としての未来さえ断たれる瀬戸際に立ったのだ。「あのころは、命を救ってくれたドクターにも「なんでオレを生かしたかった」と思ったし、ファンから寄せられる「頑張ってください」という手紙も、嫌で仕方なかった」というほど荒れた闘病生活を経て、今日を築いた。文字どおりの「第二の人生」なのである。

● 死ぬことすら許してもらえない 深い深い絶望の底

レーシングドライバーに限らず、トップアスリートには、幼いころからその競技と筋に純粋培養された選手が多い。しかし、太田氏の場合はそうではなかった。

「大学時代にたまたま知り合った人に誘われてアマチュアレーシングクラブに入り、草レースの手伝いをしていただけで、自分がプロになれるとは思っていませんでした。かといってなりたいものも見つからず、就職活動にも出遅れた。仕方なく、大学卒業間際には父のアドバイスに従い、税理士の勉強をしていたけれど、なんだか自分には向いていない気がしていました」

今なら若い鳥獣検疫とも呼ばれそうな、若者の迷いの日々である。ところが、「ある日、サーキットで初めてプロレーシングドライバーの姿を見て、急速にその職業がリアルな憧れになったんです」才能はすぐに開花した。中古車で参戦したアマチュアレースで、すぐに表彰台



サーキットで新しいレーシングスーツを着てようやく参列する「TEZZO RACERS CLUB」。



震災後、太田氏は東日本震災支援チーム「KEEP ON RACING」をすぐに立ち上げた。モータースポーツ界の動きは早かった。写真は、自身も被災しながら被災者を勇気づけるためにレースに復帰し、持年の積もりで優勝した2輪レーサーの伊藤真一選手と被災地にて。

に立ち、昼夜のアルバイトで資金を稼ぐ
でステップアップした入門フォーミュラ
レースでも強さを発揮。3年目にはプロ
としてレーシングチームと契約するまで
になったのだ。

もっとも、「父はレーシングドライ
バーが職業として成り立つはずがない、
と思っていたようで、プロを目指すと言
言したら勘当されました」という。我が
子には好きな道を堂々と歩んでほしい
と願いながら、同時に危ない道を進んで
ほしくはないと思うのが親心だ。

プロになってからの道程は、必ずしも
平穏ではなかった。自動車メーカーの
ワークスチームと契約し、順風満帆と
思った矢先にバブルが崩壊してチーム
が解散。路頭に迷う寸前に、なんとか次
の契約先を得る経験をしている。

その後も、メーカーチーム時代のような
万全の態勢ではなかった。多くの人の
協力を得て、マシンもチームも手作り
でレースに挑み、その姿勢が支持されて、
ファンを獲得していったのだ。そうして
ようやく、自らのチームを設立、プロレー
シングドライバーとしても絶頂期を迎え
ようとするころに、事故は起きてしまっ
た。

全身の40%に重度の熱傷。事故直後
には72時間の命と宣告され、周囲の誰
もが死を覚悟する中で奇跡的に命をつ
ないものの、それからが地獄だった。

骨折や打撲などの外傷なら、容態が峠を
越せば後は癒えるのを待つだけだが、火
傷はそうはいかない。

「ドクターは全治3年と言ったけれど、
それも「ありえないだろう」と思いまし
たよ」と太田氏は振り返る。

焼かれた手や足の機能を取り戻すた
めの、手術やリハビリの苦しさだけでは
ない。まぶたや鼻や唇まで焼け落ちてし
まった自身の姿に絶望した彼は、身を投
げようと病院の壁の上まで必死に上り、
そこが自殺防止のために金網で完全に覆
われているのを見て、死ぬことさえ許さ
れないのかと絶望を深めた。

ようやく退院しても、心ない視線を恐
れて自宅に閉じこもり、閉々と悩む日々。
「悩みましたよね。でも、そうして悩ん
だからこそ答えにたどりついた。今思う
とあれは修行みたいなものだったかな」

その体験は、スポーツドキュメントと
しては真例のベストセラーとなった自伝
「クラッシュ」と、続編である「リバース」
(ともに幻冬舎)に詳しい。そしてその著
書が、彼を第二の人生へと導いてくれた
のである。

世の中のためになることは 世の中が放っておかない

以前のような身体には戻れない自分
を受け入れ、生きていく決心を固めるま

で、1年が必要だった。その間と、その
後の社会復帰を支えたのは、家族や医師
団、レース関係者や自動車マスコミなど
の仲間たちだ。

懸念していた編集者は、自らが主催
する走行会に嫌がる彼を引っ張りだし、
サーキットを走る喜びを思い出させた。
自伝を書くことを勧め、知己をたどって
彼を編集者に引き合わせたのは奥様だ。
「じつはもともと、人一倍よくよする
方なんです」という太田氏が殻に閉じこ
もろうとするのを、彼らは寄ってたかっ
て外に引きずり出したのである。

著書には、そうして太田氏がふたた
び立ち上がるまでの壮絶な日々が淡々と
記されている。その作品中のヒーロー
は、奥様やお子さんであり、医師団であ
り、仲間たちだ。ときに悪役を演じてで
も、彼と世の中との絆をつなぎ続けた
人々に掛けられた物語は、新たに広が
っていく絆を生み出した。

「クラッシュ」を読んだ女子高生から、
50校の高校生が集まるイベントに来て
ください、という講演依頼が来たんです」

事故後初めて、大勢の人の前に姿を現
したその日、ハンドルが握れるように成
形してもらった右手でフェラーリを運転
して子供たちの前に乗り付けると、彼は
事故前と同じヒーローとしての視線を浴
びた。

「女の子たちからサインを求められなが
ら、「おれ、モテるな」と思いました。そ
して考えたら、大人が真剣に頑張ってい
る姿を子供が見る機会って、意外とない
んだな、と気づいたんです」

子供たちに尊敬されるカッコいい大
人の条件は、けっして容姿ではない。何
事かに真剣に挑み続ける、その姿勢な
のだ、と。そうして生まれたのがオヤジ
レーサーズだった。

「連載していた雑誌にアイデアを書いたら
全国から応募が来て、今では70人の
会員がいます。60歳を過ぎてレースデ
ビューした人もあるんですよ」と彼は嬉



雑誌社や自動車メーカーの協賛を得て催される「Tetsuya Ota ENJOY&SAFETY DRIVING LESSON」には、多くの一般ドライバーが集まる。安全なサーキットで楽しく学んだクルマの限界は、公道での安全運転にもつながるはずだ。 <http://www.sportsdriving.jp>